

近世に於ける教団と社會事業

魚津哲也

社會事業は、人間の幸福を、社会的な理念と、方法とに於て、達成しようとする事業である。有限、不完全なる人間は、その存在の理由から、種々なる要求をもち、かつ種々なる條件の不揃いの故に、それらの要求の充足に、悩まされるものである。

即ち、かような要求をもち、その不充足に悩むのは、それが有限、不完全なる、人間の存在そのものによることであつて、決してなんら特定の人間や、その範疇にかぎられた人々の宿命ではない。社會事業は、かゝる民主的人間觀に即してなされるが故に、第一義的に、人間の「社会的要求」を充足するものであり、またその充足の仕方が、援助者と、被援助者との人間關係の展開とということによつて、なされるものである。かゝる意味から、社會事業は、もはや救済、慈善事業的な性格を、完全に払拭して、人間の要求の充足を援助して、より幸福なる人生を築きまゐることを目的とするものである。かゝる意味から一応あらゆる面に於ける人間の標準への導きと考へる事としよう。こゝで「導き」と云ふ事は、救済を勿論意味する。あらゆる「面」とは、老幼經濟的教育的等が挙げられ、衛生、犯罪防止が之に伴つて来る。かゝる意味に於て、社會事業に於て根本的に必要なるものは、愛と富力であらう。愛は人類愛でありヒューマニズムでなくてはならない。現在の資本

主義社会に於ては、やはり経済的勢力、即ち社会的勢力としての密力とあるか、社会事業を左右する。こゝらの二要素即ち、愛と富とによつて、社会の事業が営まれると考へられる。他方宗教は勿論、愛とか慈悲等の形で、前者の要素は充分もっている。人類を救済すると云う意味では、社会事業も宗教も同じ機能を営むのであるが、前者は物質的供給をまづ行い次に精神的方面に及ぶに及して後者は、根本的に精神的救済であり、物質的援助はそれに対するの媒介として行はれ、伝導性を目的としてゐる。先述の如く社会事業は、密力がなくては活動する事が困難であらう。而るに、宗教者の生活は、無所有をその理想とした。しかゝこゝは物質的富のみではないと云う事を、附加しておきたい。そこで、宗教的社会事業はより根本的なる教義面より見て、社会事業を行う事に障害を来すと考へられるのではないか。私はこゝに於て、社会事業の概念の分析を試みよう。

社会事業には私的社会事業と公的社会事業であり、公的とは、組織的な教団の行う社会事業である。この様に分類すれば、私的な宗教的社会事業は、比較的少数しか見られない。何故なら宗教家個人は、徹底時でなくしては、無所有を旨とするからである。しかゝ現実には宗教的社会事業は存在している。それは多くの場合、公的である。宗教者というものは、無所有を旨としているけれども特に近代社会に入つて来るに従つて、宗教団体にも資本の蓄積と云つては過言に与るにても、その様な傾向をとつて来ている。その爲に宗教的機能としての伝道を強調する意味に於ても否今、宗教々団の社会事業への歩みが始められたと考へられる。即ち社会事業なる物時供給は宗教的伝道の媒介として考へられるのである。ナイトカンラップ (Knight Dunlap) がその著、人間生活に於ける、宗教的機能 (Religion its functions in human life : 1948) の序論に述べている言葉に、信仰から儀式が起連しなると云うより、寧ろ儀式から信仰が起連し

たとえうのと同様、宗教的社會事業は、その宗教の信仰を強化し、伝道の目的を確定的たらしめる。宗教はあく迄も、外的な宗教表現を媒介として、信仰を教化せしむる。この事は、敗戦後の日本に於けるキリスト教の伝道がまず経済的補助を、行先としてある事によって示される。社會事業は宗教団体、又は宗教家の使命である。悩めるものの救済は、現実の世に於ける宗教的に大切な機能である。孝橋教授が現代都市人か、人間関係の病氣にかゝつてゐる故に、ゴムミニテイ・オーガニゼーションを要請することになると、述べられてゐることを、興味深くあつたものである。⁽²⁾

註

- (1) Religion its functions human life: 1946 Faith develops from ritual rather than ritual from faith.

(2)

「社會事業」 孝橋教授論文

(空頁四回生)